

一 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

この空襲が開始されて、K君と私とは、いざこのあたりにも焼夷弾が投下されたら、一応の消火努力をしてみ
て、かなわぬということになったら、各個に近くの洗足池の近辺へ逃げようという約束をし、要するに茫然とし
て真赤な夜空を見上げていたにすぎぬ。「ア」近くの、田園調布一、二、三丁目、東玉川町、玉川奥沢町などへ投
下された焼夷弾は、トタン屋根を雪が滑り落ちる、異様に濁った音をたてて落下して来、あるもの
は落下途中ですでに火を噴出しているものであった。「イ」真赤な夜空に、その広範な合流大火災の火に映えて、
下腹を銀色に光らせた、空中の巨大な魚類にも似たB29機は、くりかえしまきかえし、超低空を、たちのぼる火
焰の只中へとゆつくりと泳ぎ込んで行くかに見上げられ、終始私は、火のなかを泳ぐ鮫か鱈のたくいの巨魚類を
連想していたものであった。の感情などは、すでにまったくなかった。「ウ」

たとえば、この前年の、よく晴れ上った秋空を、その空の翳みとでも言いたい高空を、ほとんどなまでに
真直ぐな、四本の白い航跡を引いて飛んで行く、偵察用のB29機などは、その純粋に金属的な、一点の銀の色
に、むしろ一種の、科学的感動をさえ喚び起こされたものであった。「エ」

しかし、一種の真空状態がそこにあつた、とはいうものの、見上げて、明らかに本郷よりは東、本所深川のあ
たりが中心と見とられる巨大な火焔地帯を望見しては、やはり、当然にその火にまき込まれている人々のことを
思わぬわけにはいかないのだ。「オ」一人の親しい女が、深川に住んでいた。そういうときに、真赤な夜空に、
閃くようにして私の脳裡に浮んで来た一つのことばが、

火の光に映じて、あまねく紅なる中に、風に堪はず、吹き切られたる焰、飛ぶが如くして一二町を越えつつ移
りゆく。その中の人、現し心あらむや。「火事の光にうつつて、一面にまっかみ見える中を、風の勢いにたえら
れず吹きちぎられた炎が、一〇〇メートルも二〇〇メートルも飛びこえては、火が移っていく。その中にいる人
は、生きた気持でいられるだろうか。」

というものであった。

その中の人、現し心あらむや。生きた心地がすまい。などと言ってみたところでどうにもなるものではない。深
川のあの女は、髪ふりみだして四方八方の火のなかを逃げまわり、

或は煙に嘔びて倒れ伏し、或は焰にまぐれてたちまちに死ぬ。「ある人は煙にむせて、倒れてしまい、ある人
は炎に目がくらんで、すぐさま死んでしまう。」

ということになっているにきまつているものであろうけれども、本所深川方面であるにきまつている大火焔の
なかに女の顔を思い浮べてみて、私は人間存在というもののな無責任さを自分自身に痛切に感じ、それは
もう身動きもならぬほどに、人間は他の人間、それが如何に愛している存在であろうとも、他の人間の不幸につ
いてなんの責任もとれぬ存在物であると痛感したことであった。それが火に焼かれて黒焦げとなり、半ば炭化し
て死ぬとしても、死ぬのは、その他者であつて自分ではないという事実は、如何にしても動かないのである。と
いうことになれば、そうして深く黙したまま果てることが出来ないで、人として何かを言うとしたら、やはり、
その中の人、現し心あらむや、とでも言うよりほかに言いようというものもないものであるかもしれない……。

鮫か鱈のようにに、その白銀の下腹に火の色をうつして入れかわりたちかわり八方からゆつくりと泳ぎ

込んで来ては大いなる火のかたまりを火の中に投げ込んで行く巨大な魚類を見上げていて、ふと頭に飛び込んで来た方丈記の一節を口の端に浮べてみ、その中の人、現し心あらむや、何を言つてやがる、などとぶつぶつと独語をしていて、しかし、^②卒然としてその節の全文を思い浮べてみると、^③それが都市に起る大火災についての、意外に(といたら鴨長明氏に失礼なことになるが、と思いながら)一意外に精確にして徹底的な観察に基づいた、事実認識においてもプラグマティックなまでに卓抜な文章、ルポルタージュとしてもきわめて傑出したものであることに、思いあたったのであった。

(堀田善衛『方丈記私記』による。一部改変)

注1 この空襲 一九四五年三月一〇日の東京大空襲。

注2 焼夷弾 火災や高熱によって建造物などを焼き払うのに用いる爆弾。

注3 B29機 第二次大戦末期から使用されたアメリカの大型長距離爆撃機。

注4 方丈記 鎌倉時代初期の随筆。鴨長明著。一二二二年に成立。文中に引用されているのは安元三(一二七七)年の大火の記事の一部。()に現代語訳を付した。

注5 プラグマティック 実利的な。

問一 空欄A・Bに入る最も適当な組合せを、次の中から選び符号で答えなさい。

- ア 要するに・とみえ イ きつと・ごとく ウ すべからく・べく
エ あたかも・ように オ たとえば・だろう

問二 空欄C・Dに入る最も適当な語を、次の中から選び符号で答えなさい。

- ア 人間存在 イ 根源的 ウ 科学的 エ 幾何学的 オ 痛切
カ 無表情 キ 喜び ク 憎しみ

問三 傍線部①「巨大な魚類」は何を指しているか。最も適当なものを選び符号で答えなさい。

- ア 都市の火災 イ 鯨や鱈 ウ B29機 エ 古典の文章 オ 焼夷弾

問四 傍線部②「卒然として」の意味として最も適当なものを選び符号で答えなさい。

- ア あつげにとられて イ だしぬけに ウ 初めから終わりまで
エ 暗記している オ 気を失うように

問五 傍線部③「それ」が指示している内容として最も適当なものを選び符号で答えなさい。

- ア 空襲 イ 口の端 ウ 方丈記の一節 エ 巨大な魚類 オ 独語

問六 次の文章は、文中の「ア」～「オ」のうち、どの箇所に入れるのが適当か、符号で答えなさい。

たまたま火のなかに墜落するものがあつても、喜びの感情も、コン畜生メという気持ちも、私にはまったくなかった。感情の、一種の真空状態、がそこにあつた。

問七 次のア～オのうち、右の文章の内容にあうものを選び符号で答えなさい。

- ア B 29機の爆撃によって引き起こされた大火災の体験は、その後の文学活動に大きな影響を与えた。
- イ 空襲で引き起こされた大火災を経験したとき、災害を描写している古典の文章の卓抜さを思い知った。
- ウ 戦争は悲惨であり、著者は空襲で引き起こされた大火災の体験から強い憤りを感じている。
- エ 災害などの被害を経験したとき、他人の不幸の事実は、やはり人間の根源に関わり、痛切な痛みを感じる。
- オ B 29機が投下した焼夷弾の恐怖は、戦争に対する憎悪の感情を呼び起こさずにはおれない。

二 次の問いに答えなさい。

問一 ①～④の傍線部のカタカナに該当する漢字を、それぞれア～オから一つ選び、符号で答えなさい。

- ① 意を決して恋文の筆をとる。
ア 取 イ 執 ウ 撰 エ 採 オ 撮
- ② 時間をあけて問い合わせる。
ア 開 イ 飽 ウ 明 エ 合 オ 空
- ③ 役者の表情がかたい。
ア 堅 イ 難 ウ 硬 エ 型 オ 片
- ④ 反論されて頭に血がのぼる。
ア 登 イ 伸 ウ 昇 エ 上 オ 乗

問二 傍線部のカタカナを漢字で書いた時、①～④と同じ漢字を用いるものを、それぞれア～オから一つ選び、符号で答えなさい。

- ① セイサイに欠ける話し方。
ア サイカクのある人物。
イ 展覧会のシユサイシャ。
ウ テイサイが悪い。
エ イサイを放つ新人。
オ サイゲンなく続く話。
- ② カンシンに堪えない思い。
ア 嫌なヨカンがする。
イ カンキがゆるむ。
ウ 古郡のヒカンを守る。
エ カンモンを突破する。
オ 受賞してカンキする。
- ③ 座右のマイ。
ア マイボで確認する。

- イ 議長にニンメイする。
 - ウ フメイな点をただす。
 - エ 主義にキョウメイする。
 - オ カンメイを受ける。
- ④ コウイに甘える。
- ア シエウコウな作品。
 - イ コウシヨウな趣味。
 - ウ ユウコウを深める。
 - エ コウタイで休む。
 - オ 時代にキヤツコウする。

問三 ①～③の漢字の読みを、それぞれア～オから一つ選び、符号で答えなさい。

① 間隙

ア かんかく イ かんきよう ウ かんげき エ かんしゅう オ かんたい

② 措置

ア ひおき イ おち ウ しやち エ そち オ すおき

③ 出納

ア すいとう イ しゅつな ウ すいのう エ でなん オ でのう

問四 ①～④の空欄に入る最も適切な熟語を、あとのア～クから一つずつ選び、符号で答えなさい。

- ① リーダーに指名されて に命令する。
- ② 伝統芸能に をもっている。
- ③ 採算を したサービスで評判になる。
- ④ 三年連続優勝という を打ち立てた。

ア 一家言 イ 居丈高 ウ 一辺倒 エ 大団円 オ 度外視
カ 正念場 キ 金字塔 ク 無尽蔵